

# TZ ほんの窓

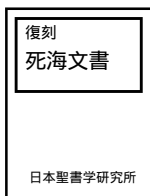
第 3 号 (2004.12.3) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏図書助成コーナー「本の紹介」班

## 死海文書 Dead Sea Scrolls ~ 発見と公刊の物語 ~

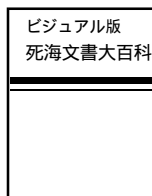
1946 ~ 47年にかけての冬に、死海北西岸で「20世紀最大の考古学的発見」とよばれることになる文書が発見された。その文書は、ペドウィンによって発見され、やがて多くの人の手を経て、そして多くのスキャンダルにまきこまれながら、世に「死海文書」として知られるようになる。今回の『TZ ほんの窓』では、死海文書がたどってきた数奇な運命、そして今なお多くの議論を呼んでいるその内容に焦点をあててみたい。

### (1) 発見とテキスト

前述したとおり、死海文書は1946 ~ 47年にかけての冬にペドウィンの若者3人によって、クムランの洞窟から発見された。この洞窟は第一洞窟と呼ばれ、その後の調査で第一洞窟を含む計11の洞窟から合わせて15,000点以上もの巻物の断片が発見された。発見当初「塩の海の巻物」と呼ばれたそれら死海文書の内容は、旧約聖書の写本、およびその偽典・外典、そしてセクト的文書からなっていた。



\*1900\*\*779\*\*

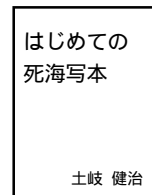


\*1900\*\*777\*\*

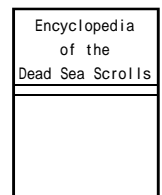
『復刻 死海文書 テキストの翻訳と解説』(日本聖書学研究所編、山本書店、1995)では、クムラン洞窟から発見されたすべて死海文書の翻訳およびそれに対する解説が、『ビジュアル版 死海文書大百科』(東洋書林、2003)には、巻物の発見からその意味まで、写真や図版をふんだんに用いて解説されている。本学の土岐健治教授が上梓した『はじめての死海写本』(講談社現代新書、2003)には、死海文書の概要、およびそれが著された時代背景が年代毎に詳細に記されている。また、『Encyclopedia of the Dead Sea Scrolls』(Oxford University Press、2000)では、死海文書に関するあらゆる事項が辞書形式で掲載されている。

『復刻 死海文書 テキストの翻訳と解説』(日本聖書学研究所編、山本書店、1995)では、クムラン洞窟から発見されたすべて死海文書の翻訳およびそれに対する解説が、『ビジュアル版 死海文書大百科』(東洋書林、2003)には、巻物の発見からその意味まで、写真や図版をふんだんに用いて解説されている。本学の土岐健治教授が上梓した『はじめての死海写本』(講談社現代新書、2003)には、死海文書の概要、およびそれが著された時代背景が年代毎に詳細に記されている。また、『Encyclopedia of the Dead Sea Scrolls』(Oxford University Press、2000)では、死海文書に関するあらゆる事項が辞書形式で掲載されている。

『はじめての死海写本』(講談社現代新書、2003)には、死海文書の概要、およびそれが著された時代背景が年代毎に詳細に記されている。また、『Encyclopedia of the Dead Sea Scrolls』(Oxford University Press、2000)では、死海文書に関するあらゆる事項が辞書形式で掲載されている。



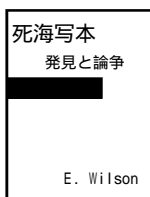
\*1900\*\*741\*\*



\*1900\*\*825\*\*1-2

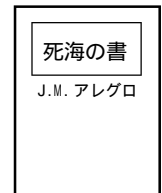
### (2) 死海文書の出版の遅延とそれについての多くの憶測

第四洞窟を除くすべての洞窟から発見された巻物はどれも公刊までさほど時間はかからず、1970年代までには公表された。しかし、残された第四洞窟から発見された巻物だけは、どれも破損のひどい断片的なもので、その解読は遅々として進まなかった。このような状況下で、いよいよ巻物を世界に知らしめた論争が幕をあげたのである。そのきっかけとなったのが『アクセルの城』で高名なエドモンド・ウィルソン(米)が雑誌 New Yorker (Vol. 31, no. 13, 1955) で発表した論文で(後に『死海写本 発見と論争』(桂田重利訳、みすず書房、1979、原著は1969)という題名で出版)彼は死海文書と初期キリスト教との関係に初めて注目した。

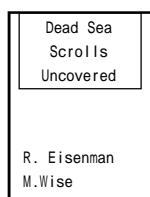


\*0g\*\*2024\*\*

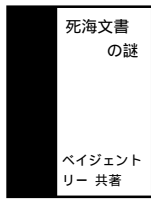
「死海文書の刊行が遅れているのはその内容がキリスト教に有害だからだ。」このような驚くべき見解を最初に発表したのは、なんと巻物の解読のために組織された国際チームの一人である J.M. アレグロ(英)だった。彼の著書『死海の書』(北沢義弘訳、みすず書房、1957、原著は1956)では、彼の見解が余すところなく述べられている。それに引き続き、R. Eisenman もまた、死海文書はキリスト教に関連するものである、という論を発表した(後に M. Wise と共著で『Dead Sea Scrolls Uncovered』(Barnes & Nobles Books、1994)という著作を出版)。このアイゼンマンの説をうけて、今度は ペイジェント(ニュージーランド)とリー(米)という2人の研究者が、「死海文書が公表されないのは、それがキリスト教に有害だと知ったバチカンがその刊行を差し止めているからだ」という「バチカ



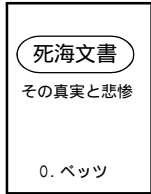
\*0g\*\*690\*\*



\*1900\*\*822\*\*

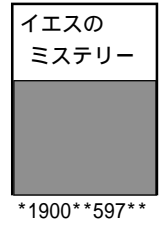


\*0g\*\*2002\*\*



\*1900\*\*780\*\*

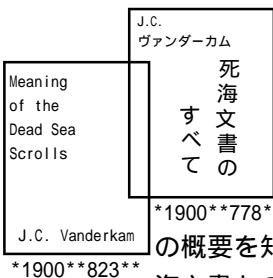
ンの陰謀説”を『**死海文書の謎**』(高尾利数訳、柏書房、1992、原著は1991)で世間に発表した。これだけにとどまらず、さらに**スーリング**(豪)という研究者が「実は死海文書にはイエスの真実を解くための鍵が隠されている」という説を『**イエスのミステリー**』(高尾利数訳、NHK出版、1993、原著は1992)の中で発表すると、この本はたちまちベストセラーとなった。イエスは十字架刑の後も生き延び、マグダラのマリアと結婚して子供までいた、というセンセーショナルな説を繰り広げた。これらの著作については、雑誌「福音と世界」(1994.10)で「小説『イエスのミステリー』の面白さ」と題する書評(土岐)が書かれているが、大変興味深い。実際これらの説がどのように研究者たちに受け入れられたかを描いているのが『**死海文書 その真実と悲慘**』(清水宏訳、リトン、1995、原著は1993)である。それぞれの説に対してそれがなぜ正論ではないのかを詳細に解説しており、死海文書の細かい部分までわかりやすく解説している。



\*1900\*\*597\*\*

### (3) 死海文書解読の現在

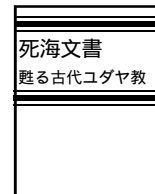
では、世間でこれだけ様々な説が飛び交った死海文書の実態は何なのか。それを知るにはまず、**J.C. ヴァンダーカム**『**死海文書のすべて**』(秦剛平訳、青土社、1995、原著は1994)、『**Meaning of the Dead Sea Scrolls**』(HarperCollins、2002)および**S. Hodge**『**The Dead Sea Scrolls**』(Judy Piatkus、2001)がよい。また、日本での死海文書研究の第一人者である**高橋正男**氏の『**死海文書 甦る古代ユダヤ教**』(講談社、1998)も、死海文書の概要を知るには参考になる。それぞれ旧約聖書、新約聖書と死海文書との関連が述べられているが、旧約聖書の最も古い写本と



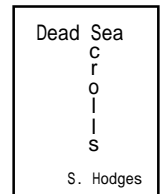
\*1900\*\*823\*\*



\*1900\*\*778\*\*

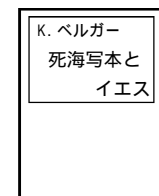


\*1900\*\*776\*\*



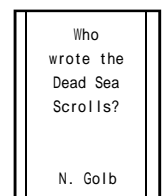
\*1900\*\*824\*\*

しての死海文書、そしてキリスト教とユダヤ教の重要な類似性の解説も死海文書を理解するうえでなくてはならない部分である。また、死海文書を考える上で、**だれが死海文書を書いたのか**、ということ、そして**死海文書はいつ書かれたのか**、の2点について、上にあげた4冊は非常に詳細で、わかりやすい解説を示してくれる。



\*1900\*\*568\*\*

前者について、一般に死海文書はエッセネ派と言われるユダヤ教の一派が残した文書であるといわれているが、近年そうではないとの説も浮上してきている。また、イエスはエッセネ派だった、という説もある。これらの説を考える上で興味深い図書として**N. Golb**『**Who wrote the Dead Sea**



\*179\*\*103\*\*

**Scrolls?**』(Scribner、1995)と**K. ベルガー**『**死海写本とイエス**』(土岐健治監訳、教文館、2000、原著は1993)がある。

このように死海文書についてはさまざまな説があり、今なお議論が続いているが、最新の死海文書研究を知るには、雑誌「**Dead Sea Discoveries**」(\*\*ZQM\*162\*)がある。現在行われている死海文書についての研究論文とともに、書評も毎号掲載され、死海文書研究の動向を知るにはうってつけである。また、ここでは紹介しきれなかったが、本学図書館は死海文書について書かれた多くの本を所蔵しているので、一度**HERMES**(OPAC)で、死海文書(Dead Sea Scrolls)あるいは**クムラン**(Qumran)を検索してみるとおもしろいだろう。また、**土岐健治**教授が雑誌「**本**」(Vol.28, no.12, 2003)に発表した「**死海写本雑感**」にも多くの文献が記されていて参考になる。また、CD-ROM版で死海文書のテキストを直に操作してみたい、というときには『**The Dead Sea Scrolls Electronic Reference Library**』(\*Avw\*\*52\*\*2)がある。ただし、これは当日貸出のみなので、利用するにはカウンターで申し込む必要がある。



\*\*ZQM\*162\*

また、死海文書と同様、洞窟のなかに隠されていた資料として**敦煌文書**がある。聖書研究に大きな影響を与えた死海文書とともに、東洋史、とりわけ仏教研究に大きな影響を与えた敦煌文書の翻弄された過程についても関心が湧く。

(雑誌情報係 村井)